# 淨瑠璃雜話

## 一

能樂・人形淨るり・歌舞伎と日本の藝能のもつとも發達したものを抽出して考へると、古色蒼然たるだけに、內容はとにかく保存方法において能樂は、演出の形式だけは整つてゐる。後の二者に至つて時代色が新しいだけに、保存方法さへにも異論が多い。こゝでは歌舞伎において問はない。人形淨るりの場合をのみ取上げていふと、純古典としての保存と、街頭に引だして今日の思想なり事件なりを、この古典の形式に盛らうとするものと二つの行方が主張さるゝが、この兩派は共に自分の目安にのみ偏してゐるやうだ。手ツ取早い話が、單に「陶工」といつても臺所用の茶碗、德利の製作者も「陶工」なれば「工藝美術」に踏込んだ祥瑞でも、木米でも、乾山でも、藏六でも、河井寬治郎でも「陶工」だ。「陶工」にもピンからキリまである如く「人形淨るり」にもピンからキリまであらうぢやないか。

私どもは、今日唯一つ殘存した大阪文樂座の人形淨るりだけを、「祥瑞」にでも「乾山」にでもしておきたい念願を持つてゐるが、「營業である以上は商品だ、お客の喜ぶ前受をして何が惡い」といふ心意氣が、今の文樂座の內に、澎湃としてゐる。「滅亡」へ拍車をかけるものは、この「心

持」だ。「お客の前受」は往々にして、仁清の「味」よりも、柿右衛門の「色」よりも、硬質陶器の「實用性」を喜ぶ庶民の鑑賞だ。――故に仁清よりも柿右衛門よりも「硬質陶器」が今日の工藝美術だといふ結論には導かれない。

「時」の力は何んともならぬ「成るやう」になるのであらう。――とあきらめても、あきらめられぬものもある。例へばこの盆替り（昭和七年八月）の文樂座にお定りの「酒屋」が出てゐる。この語り場の番付に

切　竹本錣太夫
　　豐澤新左衛門
後　豐竹呂太夫
　　鶴澤叶

とある。淨るりにおいて「切」――即ち「切り場」の大せつな事はいふまでもない。が「後」（アト）と淨るり道の術語でいふと、一段のつゞまりのついた「後（アト）始末」の場といつた意で古來番付面ではアトといひ、太夫、三味線仲間では「落合」とも別稱してゐる。

實例でいふと、素人にもよく「アト」といふ言葉の意味が判明する。即ち『廿四孝』の狐火が

すんで、濡衣が殺さるゝ所。これが『廿四孝』の四段目のアトといふのである。『忠臣藏』の城渡しが四段目判官切腹の段のアトである。『布引』の四段目でいふと紅葉山の條りがアトである。『鏡山』を例にとると、奥庭のお初が岩藤を殺す一件が「アト」で、この語り場を「アト」とも「落合」とも言慣はしてゐる。

然るに『酒屋』においては「アト」といふ語場を缺く語り物である。その『酒屋』にアトを豐竹呂太夫が叶の三味線で語るといふ右の番付面は、實は無意義に聞える。詳しくいふと『酒屋』とは俗稱で『艶容女舞衣』上中下の三卷の院本であるが、その下の卷が、書卸しには、「口」「切の口」「詰」と分割した「上鹽町の段」といふ語り場で、この書卸にいふ「詰」とは「心中の段」である。「上鹽町の段」の分割した一部分ではない。下の卷の卷尾なる「心中の段」である。この上鹽町の段が後には「半七の内」と呼ばれ更に「酒屋の段」と呼び名に變遷のあつた事はその興行を重ぬるたびの各番付の示す所であるが、「上鹽町」でも「半七内」でも「酒屋」でも「アト」といふ語り場がある筈がない。

然るに九月の文樂座に「後」といふ紛らはしい形式を踏んでどこを語つてゐるかといふと、お園のサワリがすんで「乳飲まう」とお通の出からの以下を「後」と今度に限り言つてゐる。手も

なく『酒屋』を分割して「切」と「後」といふ紛らはしい言葉を用ゐたにすぎない。かういふ必要のない古格の破潰が行はるゝ事は考へものだ。

## 二

「お園のサハリ」と、私は右にいつたが、淨るりの「サハリ」とは何んぞや？――これは相當の問題だ。雜誌「演劇」の七月號（昭和七年）豐竹古靱太夫が「サハリ」とは節の名で、今日俚俗にいふ「サハリ」は私共の方では「クドキ」といひますといふ意味の話をしてゐる。八月某日鶴澤友次郎がラヂォ放送で、サハリに關して同じ意味の事をいつてゐる。「サハリ」と「クドキ」とでは詞の意味が、いつの頃よりか混淆して通用され、今日まで何人も正しくハツキリと定義を下してゐないやうだ。が、當今文樂座において「研究家」と評していゝ古靱といひ友次郎といふ太夫と三味線との重鎭が斷言してゐるのだから、俗用と正しき用語とに相異ある事に間違ひがないが、文獻的にはどうか、を今調査してみる。――とかうだ。

手近な一般の辭書（例へば「辭林」）などでは、「觸り」のサード ミイニングとして「義太夫節にて戲曲中述懷の場合などにおける流麗な文句の所」とあるが、この說明は「クドキ」にもその

まゝ適用が出來る。また「クドキ」の項目を見ると、その說明がなくて「口說歌」に「そゝりぶしの一種、なげぶしに謠ふもの、昔吉原返りの遊客などよく臺唄にて謠へり」とある。――「なげぶしに謠ふ」とある。「なげぶし」とは？「聲を投捨つるが如くに節を輕くきりて永く引かざる事」とあり、「なげぶし」の專門的說明は別に知られてゐるからここにはいはぬが、結局義太夫節における「サハリ」と「クドキ」とは一般の辭書ではハツキリした區別がない。

「サハリ」が混淆して俗用されるに至つたのは元來性質の違ふものを同一線上において一つなみに觀察したからの誤用で、淨るりの上でいふ「クドキ」は、淨るりの「章」とか「節」とかの文章の內容に及んだ一條りを指していふ詞で「道行」などと同類項で「述懷」「傍白」「獨白」などに用ひる。「サハリ」とは、內容に及ばない一個の「フシ」の名稱である。竹本大和掾口傳竹本千賀太夫（有觀堂）筆記の「音聲巨細祕抄」には明かに「サハリ――歌がかりといふ如し」と說明してある。又「兩節辨」には「淨るりの內少しにても外のふしにかゝるをさはりといふなり」とある。これを信憑するに足る「朱章」卽ち豐竹麓太夫――彼の「太十」の書卸しの、節付者の手澤本なる「千本櫻」の鮨屋で調べると、「サハリ」と朱章のあるのは

「女房顏していふて見る」

「神ならず佛ならねば」
「たとへこがれて死ねばとて」
などの一くさりで、この短句を今日語る實際が「歌がかり」の節廻はしであり、古來耳から口へとさう傳へられてゐる。

これを以て見ると、サハリとは「口淨るり」「そゝり淨るり」「歌がかりの淨るり」の意に用ひたのが、いつか、素人の間に「クドキ」の場合に輕卒にも誤用されたものらしい。そして「サハリ」の語原は辭林などでいふ「觸ル」から派生したものでなく「語る淨るり」に「唄ふ淨るり」がかつたといふ意味のサハリであると私は解する。——卽ち「響銅」といふ銅、鉛、錫の「合金」といふ語原から派生したものだと私は常に思つてゐるが、言語學者の專門的の說が聞きたい。

從つて「跡には園が憂思ひ……」はクドキであつて、サハリではない。「三つ違ひの兄さんと」もクドキである。この「酒屋」のクドキで人形からいふと、今の文五郎などは、淨るりの內容に相應せずに、足踏高らかに、誤つたる形式美だけで前受けを狙つてゐるが、これは決して昔からの型でなく、「人形」に魂がなくなつて墮落してからの樣式である事を、人形遣ひもお客も、今日では忘れてしまつて、これでいゝ事にしてゐるのは、道のために歎しい事である。「お通を一目

と延上り」の三勝は、人形も淨るりも踊つてはならぬと、ハツキリと故名人がいつてゐるが、近頃の太夫と人形とを御覽なさい。――淨るりは踊り、人形は跳ねてゐる。そしてそれは昔からだと思ひ込んでゐる。ソコに大きな誤りがある。

## 三

御靈で殺された初代の豐竹古靱太夫は、「酒屋」を得意としただけに、金に窮すると、「酒屋」を入質した。或は靱太夫は「質店」を質に入れたなどの逸話が殘つてゐる。「酒屋」「質店」を典物にするといふ事は、その床本を擔保とするのだが、その意は、請だすまで「酒屋」なり「質店」を斷然語らないといふ事である。今日の眼から見ると、形式的には擔保の性質を缺くが、太夫によつての「得意の語り物」が金錢に換算出來る財産でもあつた。私は昔の藝人の「藝」を入質した期間その「藝」を演じなかつたといふ德義心よりも、擔保の性質が生れる程の「ソノ人の藝」を、世間が認めた「時代」を羨ましく思ふのである。が、こんな話は傳統的にのみ聞いてゐたので、おとぎ話のやうに私の文證癖畫證癖で思ひなされてゐた。

ところが、頃日今の豐竹古靱太夫が求めた『花雲佐倉曙』の牢屋の段の床本の中に、三十兩の

證書が挿み殘されてあつた事を發見した。この牢屋の段を入質してゐる文言。――「その許殿へ相渡し候上者出語り及不申（原文のまゝ）床内にても決して語り間敷候」――とあつて、借主は竹本織太夫、貸主は淺野常次郎殿とある。織太夫は後に六代目竹本綱太夫になつた飛切美聲の名人。淺野は太夫元である。この證文の行使されたのが、「申四月」とあるから、明治五年の事。そしてその牢屋の床本には織太夫自筆の識語「嘉永五年に佐倉曙が三代長門太夫の新作で、牢屋の段は豐竹湊太夫の語り場であつたのを十二歳で聞きながら毎日々々修業した」といふ意味を「辛未冬」の日付で認めてある。即ち辛未は明治四年で、この本を入質したのが、明治五年。翌六年には道頓堀竹田芝居で、牢屋の段を織太夫が語つてゐる。此時の牢屋の段が古今の絶品で大當りだつたとの語り傳へがある。床本の識語・床本入質の證文・六年九月の竹田の番付を机上においてみると織太夫の風格なり、その美聲が自づと耳に響くやうな心地がする。

織太夫は、左官の綱太夫と呼ばれて、手首まで、全身刺青のした小イキな江戸ッ子で、樂屋入するにも職人風の半天姿の時もあれば、イキで高等な扮裝であつたりしたといふが、一日町の角庫を塗つてる左官をフフンと鼻でわらつた、笑はれた左官は織太夫といふ太夫は生意氣な奴だ、をかしければ手めえが塗つて見ろ。といつたのを小耳にした織太夫は、羽織を脱いでポンと投げ

尻端折のコテの鮮やかさに、見る者を驚かしたさうだが、「左官の綱太夫」と呼ばれる如くその家業の出身、左官の息子だつたのだ。この織太夫は四十四歳で明治十六年に死んだが、その遺娘二人が東京の新橋と築地とに今も居る。

この左官の綱太夫は、當時の太夫で恐れをなしてゐたのは初代の古靱太夫、唯一人であつた。後の攝津大掾のあの美音などは、問題にもしなかつた。古靱が御靈芝居（文樂座にあらず）で斬殺されたと東京で聞いて、織太夫はホツと安心の吐息をついたといふ事が傳へられる。美聲の織太夫が、美音無比と唄はるゝ越路の淨るりなど眼中になく、古靱の淨るりを眼の上のこぶとした織太夫のその心持は、やがては織太夫の淨るりの風を如實に物語り、その語り口をも暗示するものと見てよからうかと私は思つてゐる。

と、――書終つた時に、右の織太夫の證文のはさんであつた「牢屋」の床本を新たに買求めた今の古靱太夫が、織太夫が綱太夫となつてからの同じ「花雲佐倉曙」の四段目切の綱太夫自筆の朱入本を手にいれたと報告してくれた。その四段目床本に綱太夫の識語があつて、右の「牢屋」入質のその後の模樣が認めてある。これでこの證文一埒の資料が、今の古靱の手許に揃うた事になる。

綱太夫自ら認めてゐる如く、太夫元淺野から質受けして竹田芝居で、「牢屋」をだすと、素晴らしい人氣であつたやうだ。この前人氣が太夫元に映じてあればこそ、擔保の性質も出來、又「牢屋」を語るといふので「給銀は二杯半」と綱太夫が、自記してゐる。「二杯半」とは「給銀十五割增し」の意である。この人の「牢屋」の評價が察知される。綱太夫が、明治九年四月土佐高知へ旅に行つた時「お好み」とあつてこの「佐倉曙」の四段目を語るについて「餘賂(ヨナイ)として三十五兩」受けたとしてゐる。「餘賂」とは本給銀の外に特給の謝禮金の意であるが、「佐倉」一夜のヨナイが高知で當時三十五兩だした事は、たま〳〵綱太夫の「佐倉曙」の人氣を裏書する。そしてこの夜の木戸が十六錢であるに拘らず「佐倉」が出る出ないに拘らず、木戸二十錢、三十錢とプレミアムがついたと記してある。明治九年といふ時代、高知といふ南海の一地方で十六錢の木戸が既に特種だ。「座席無之」でプレミアムがついて、お客をすしの如く押込んだのだ。綱太夫の藝と新作「佐倉」の人氣とが回想される。

新作「佐倉曙」が、それほどの傑作たつたらうか？　問題はこゝだ。此作は三代長門太夫の作者名佐久間松長軒と署名してゐるが、講談の宗五郎の淨るり化に過ぎない。然らば「空閑少佐」の新聞記事の淨るり化を非難する所以はない筈だが、事實はさうでない。「佐倉曙」は讀んで傑作

かといふにさうでもない。寧ろ凡作である事、「空閑少佐」の「其幻影血櫻日記」と同架すべきだが、問題は作曲者にある。演者の藝にある。三代長門といふ中興の名人が節付をしてこその「佐倉」であり、新作である。

淨るりをいふに机上で院本を讀んでいゝも惡いものでない。三味線にかゝつての淨るりだ、人形だ。この點を忘れで昭和の今日淨るりの新作が斯道興隆の道だと一圖に主張する、靑疊の上の水泳の達人がゐるから、世の中の事は間違ふ。昭和の作曲家あつての新作可能である。その上に時代の音樂が、今日文樂座でやる如き新作を拒否してゐる事を忘れてはならぬ。嘉永の昔『佐倉』の出來た時と、昭和の今日とでは社會の耳が違つてゐる事をも算盤にお容れなさい。かういふ一切合財は天才の作曲者が生れて、凡てを解決してくれる。然しソレはもう今の人形操りではないはずだ。こゝに人形淨るりの保存の重點がなくばならぬ。長門新作の『佐倉曙』を語つた綱太夫の資料を得て、往時を顧み想ふ事いよ〳〵繁し。

（昭和七、一〇）

竹本織太夫使用の『曙倉佐雪花』本床（筆目の夫太織は語識）
（藏所夫太靱古竹豐代二）

六代竹本綱夫太夫（夫太織名前）使用の『曙倉佐雪花』本床と紙表の
語識「綱夫太自筆」（藏所夫太靱古竹豐代二）

竹本織太夫が『佐倉曙』の牢屋を担保にして借金証文
貸主の淺野常次郎は當時の金方

大阪道頓堀竹田芝居で織太夫が『佐倉曙』の四段目
牢屋の段を語つた時（明治六年九月）の番付